

静かに高まるアチェの緊張

西芳実*

8月1日から10日間あまり、私はナングロ・アチェ・ダルサラーム州を訪ねた。ナングロ・アチェ・ダルサラーム州はスマトラ島の北端に位置し、州都バンダ・アチェはジャカルタからメダンを経由して飛行機でおよそ3時間である。

ジャカルタを発つとき、私はかなり緊張していた。インドネシア政府がこの地域に対して民事非常事態宣言の発令を検討しており、それが8月5日に決定されるらしいことが1週間ほど前から報道されていたためである。アチェのインドネシアからの独立を主張して武装闘争を続ける自由アチェ運動と、これを認めないインドネシア政府との間では、2000年6月以来、さまざまな形で話し合いの場が設けられ、武力によらない解決の道が求められてきた。しかし、その試みは十分に実を結んでいないようだった。

バンダ・アチェに到着してみると、町の様子は私が初めてアチェで長期滞在を始めた1998年ごろとほとんど変わらないように見えた。すり、置き引きに気を使うことのない静かな田舎町である。以前と異なっていたのは役所や銀行の看板にジャウィ表記が加わっていたことぐらいだ。増派につぐ増派で3万人以上になっているはずの軍・警察部隊もあまり目立たない。

しかし、町の人々の緊張はとけていなかった。「ついこのあいだも精神病院の院長が誘拐された。身代金を5000万ルピア要求されている。」私が到着したときはこの話で持ちきりだった。以前なら誰かが誘拐されたり殺されたりすると、その人物が政府寄りだったか自由アチェ運動寄りだ

ったかで誰の仕業かを憶測したりしたものだった。今は、それもされなくなっていた。「最近はみんなお金」。政府の役人や地方議会の議員のなかには旅行の際に身分証明書を持ち歩かないようにしている人もいた。通勤途上で拉致される可能性があると言って、勤務先の近くに新たに家を借りた人もいた。

夜の外出も、人々は自主的に控えていた。午後7時を過ぎるとベチャやラビラビと呼ばれるミニバスはほとんど営業をやめ、車の往来は格段に減る。外出だけでなく、門に鉄の鎖をつけて夜半の訪問客を極力断るようにしている家もある。

私は北アチェ県のロスマウエまで車をレンタルして出かける予定だったが、その旅行も変更を余儀なくされた。車のレンタル料が昨年4月の2倍に跳ね上がっていたためだ。運転手付きのキジャンでバンダ・アチェから市外に出かけた場合、丸一日レンタルして、高くてもガソリン代を入れて35万ルピアというのが昨年の相場だった。ところが今回は70万ルピア出してくれという。どこで車を誰に没収されるかわからないから、というのがその理由だった。

私がアチェから帰国して間もない9月上旬、旅行目的でアチェを訪問した外国人が2人、自由アチェ運動と接触した疑いで警察に身柄を拘束されたという知らせがアチェから届いた。インドネシア政府側の緊張も高まっている。

* 東京大学大学院・博士課程